

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

養?徹定の古経蒐集と松尾社一切経

著者	生駒 哲郎
雑誌名	The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	3
ページ	173-178
発行年	2013-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000039/

養鷗徹定の古經蒐集と松尾社一切經

生駒 哲郎

はじめに

筆者は、京都に所在する本門法華宗大本山妙蓮寺において、松尾社一切經の整理・調査をする機会を得た。松尾社一切經は、京都法然院等に数十卷所蔵されていることは知られていた（１）。その後、1993年に妙蓮寺の土蔵から3500巻余りが新たに発見された（２）。松尾社一切經は、松尾社の神主であった秦親任・頼親父子発願の十数人の手によって書写され、奥書等から永久3年（1115）から書写を開始し、康治2年（1143）に校合を終了した平安時代後期の『貞元新定釈教目録』の入蔵録（３）に基づく写本一切經である。

妙蓮寺の土蔵に保管されていた状態は、ある意味無秩序で一切經完成当初の配列ではない。それは、正保4年（1647）10月15日付の書写奥書を持つ松尾社神宮寺の供僧によって作成された松尾社一切經の目録『松尾社神宮寺一切蔵經目録』によると、すでに江戸時代にみられる（４）。この目録の構成は、①4巻以上からなる經典、②「上中下全」と記載された全3巻からなる經典、③「上下全」と記載された全2巻からなる經典、④「壹卷全」と記載された1巻からなる經典に分類されて、それが松尾社神宮寺の保管状態であったと考えられる（５）。

こうした保管状態は、松尾社一切經がどのように受容されてきたのかを窺い知ることができる。本稿は、松尾社一切經完成後の受容のあり方を考察する上で、同一一切經がどのような過程で妙蓮寺に奉納されたかを検討するものであるが、特に江戸時代末期の養鷗徹定の古經蒐集活動との関連で考察する。

1 養鷗徹定と松尾社一切經

養鷗徹定（1814～1891）は、嘉永5年（1852）3月、39歳の時に江戸増上寺第66世冠誉慧嚴大僧正の命を奉じて、京都の東山鹿ヶ谷に所在する法然院において、白蓮社忍激（1645～1711）の『大藏經対校録』を謄写するため入洛した。その際、徹定は、經典に誤字・脱字が多いことを嘆き、南都を中心に諸寺院を歴訪し古写經を探し求めたのである。その成果は、『古經搜索録』や『古經題跋』、『訳場列位』等として刊行されている（６）。

こうして編纂された『古經題跋』には、松尾社一切經に関する次のような記載がある（７）。

○松尾神宮寺蔵

大藏經全部

永久中秦神主宿禰親任及頼盛・雅遠等所附也、永治元年辛酉十一月二日以延曆寺西塔院報恩藏本一校了、賢智

願以書写力、上求菩提縁 上中下衆生、総至沙界外、現世身堅固、後生生浄土、同修普賢行、

「大蔵經全部」とあるが、京都妙蓮寺に現存しているのは、3500 巻余りである。また、前述した『松尾社神宮寺一切蔵經目録』には、「都合巻数三千九百九十九巻」とあり、『貞元新定釈教目録』の入蔵録に基づく 5000 巻以上からなる同一切經は、正保 4 年の段階で、すでに 1000 巻以上が散逸していたことになるのである。

また、「秦神主宿禰親任」は松尾社一切經の願主松尾社神主秦親任で、「頼盛」は、妙蓮寺所蔵松尾社一切經の『大迦葉本經』(No.2519)の奥書に「永久五年(1117)七月十一日巳時書寫了、藤原頼盛」(8)とある藤原頼盛のことである。「雅遠」は、『大方広仏華嚴經』卷第 55 (60 華嚴) (No.966)の奥書に「永久三年(1115)七月廿七日 書畢、執筆中原雅遠」とある中原雅遠のことである。また、校合僧の「賢智」は、『大方広仏華嚴經』卷第 23 (60 華嚴) (No.928)の奥書に「永治元年(1141)辛酉十一月三日 以伏見本一交了、天台僧賢智」とその名が記載されている。さらに、校合本の「報恩蔵本」とは、同じく『大方広仏華嚴經』卷第 23 (60 華嚴) (No.928)の奥書に「西塔東谷喜見房以報恩蔵本一校了」と記載されている。

松尾社一切經は、「報恩蔵本」の他に、「梵釈寺本」や「東陽座主御房古本」などがみられるが、「報恩蔵本」は、『大方広仏華嚴經』(60 華嚴)のみに用いられた校合本である(9)。これらのことを考慮すると、『古経題跋』に記載された「永治元年辛酉十一月二日」という校合の年月日を有する經典は、現存する京都妙蓮寺所蔵の松尾社一切經中にはみられないのであるが、養鷗徹定は、『古経題跋』に松尾社一切經の記事を記載するにあたって、同一切經のなかでも『大方広仏華嚴經』(60 華嚴)には目を通していたことが指摘できる。

それでは、松尾社神宮寺に所蔵されていた松尾社一切經は、どのような経緯で妙蓮寺に入ったのであろうか。詳細は判明しないが、松尾社一切經の経箱蓋裏には、「松尾社／寄附主 嶋田氏／古本写本一切經」と墨書されている(10)。また、同一切經の経箱を括っていた紐には、「安政四年(1854)／嶋田氏」の札が付されていた。これらの墨書から「嶋田氏」という人物によって、松尾社一切經は、妙蓮寺に奉納されたことがわかる。嶋田氏については、妙蓮寺に「嶋田弥三郎義忠母」が寄進した安政 4 年の年紀を有する『法華經』8 巻が所蔵されている(11)。さらに、妙蓮寺には、聖教を納めるための長櫃の蓋裏に「奉寄進 妙蓮寺／聖教御櫃／令法久住／嘉永第四辛亥秋七月」、「本能寺八品講衆頭 嶋田弥三郎 義忠(花押) 生年^(マツ)二八」等と墨書されている(12)。嶋田弥三郎義忠については、妙蓮寺と同じ京都法華宗の本山に名を連ねていた本能寺の「八品講衆」であつたと記されている。こうした記述から、嶋田氏の法華宗寺院内での活動がわかるとともに、松尾社一切經は、安政 4 年頃の江戸時代末期に、嶋田氏によって妙蓮寺に寄進されたことがわかる。

このように妙蓮寺に松尾社一切經が入ったのは江戸時代末期と考えられるが、養鷗徹定は、松尾社一切經を何処で閲覧したのであろうか。徹定が法然院において、『大蔵經対校録』の謄写を始めたのが、嘉永 5 年(1852)で、『古経題跋』の刊行が文久 3 年(1863)である。徹定の閲覧はその間の期間ということになる。前述したように安政 4 年に松尾社一切經が妙蓮寺に入ったとすると、徹定の同一切經の閲覧は、妙蓮寺でという可能性もあるが、やはり、徹定は妙蓮寺ではない場所で閲覧したと思われる。というのも、『古経題跋』に松尾社一切經は、妙蓮寺の所蔵ではなく「松尾神宮寺蔵」と記載されている。『古経題跋』の記載は、松尾

社一切經に欠巻が 1000 巻以上あるにもかかわらず「大藏經全部」とあるので、そのまま史実とすることはできないが、徹定には法華宗（日蓮宗）系寺院において古經典の調査を実施した記録がない。したがって、養鸕徹定の松尾社一切經の閲覧は、同一切經が妙蓮寺に奉納される前であった可能性が高いのである。

2 松尾社一切經混在の袋中蒐集一切經

養鸕徹定は、南都を中心に古經典を探索した際、南都降魔山善光院念仏寺所藏であった袋中蒐集一切經の一部を同寺から購入した。徹定が購入した經典数等は正確にはわかっていないが、京都知恩院やその他の機関に現存している。そもそも、袋中良定（1552～1639）は、織豊・江戸時代初期の浄土宗名超派の学僧である。慶長 8 年（1603）に琉球に渡り 3 年間滞在した後、京において木幡の浄土寺住持となり、慶長 16 年（1611）に檀王法林寺、元和 5 年（1619）に袋中庵を開いた。元和 8 年（1622）には南都に降魔山善光院念仏寺を建立し、一切經を蒐集した。不足分は袋中自身が書写して、一切經を完成させ念仏寺の經藏に納めた。これが袋中蒐集一切經で、いわゆる取合せの一切經である（13）。

これら袋中蒐集の念仏寺一切經は、主に南都の浄瑠璃寺にあった不揃いの一切經を購入し、その欠巻を新たに書写したという。また、袋中蒐集一切經の特徴としては、「一切經南都善光院」の朱印が捺されていることである。

実は、この「一切經南都善光院」の朱印がある經典一卷が妙蓮寺所藏松尾社一切經のなかに混在している。それは、『金剛頂經金剛界秘密三摩地札懺文』1 巻で奥書には次のようにある（14）。

願以書写力 父母及衆生 永離三惡趣 速証大覺位 自他法界同利益

西小田原之一切經内也 承安四年六月十日書之了 仏子融信之

「西小田原」とは、西小田原山浄瑠璃寺のことで、先述した袋中が蒐集した浄瑠璃寺に納められていた一切經中の經典である。この經典は、「一切經南都善光院」の朱印があることからわかるように、袋中が念仏寺一切經として蒐集する前に散逸したものではない。また、「一切經南都善光院」の朱印があり同じような奥書を持つ經典としては大東急金文庫所藏『智炬陀羅尼經』1 巻が知られている（15）。それにも「承安四年六月十日書之了 西小田原之一切經内也 仏子融信之」とある。こうした奥書のある經典として養鸕徹定の『古經題跋』には、「優婆夷墮舍迦經一卷」に「承安五年乙未二月十六日敬奉書写 仏子融信」と記載されている。この奥書に記載された承安 5 年（1179）は、先の 2 經典の奥書にみられた年の翌年であり、書写者は同じ融信という僧であることからわかるように、この經典も本来は、浄瑠璃寺一切經で、後に袋中蒐集の念仏寺一切經に組み込まれていたと考えられる。

養鸕徹定は、袋中の一切經蒐集行為をかなり意識していたと思われる。『古經搜索録』や『古經題跋』の序文には、「寛永中平安岱（袋）中庵良定上人、討尋南都西京諸山之零本残編、以集成大藏經全部、今収弃于寧楽念仏寺者也、嘉永壬子之秋、余西游、搜訪諸山古經、適得縦觀之」と記載され、袋中の一切經蒐集行為は、ある意味で、徹定自身の宗教行為に正当性を与えたという側面を指摘できるのではないだろうか。つまり、袋中の一切經蒐集行為は、徹定の古經典探索の指針となっていたことを窺わせるのである。

こうしたなかで、妙蓮寺所蔵の松尾社一切経中には、「一切経南都善光院」印のある經典が混在しているのである。

3 法然院所蔵の松尾社一切経

妙蓮寺の他に、纏まって松尾社一切経を所蔵する寺院としては、法然院が知られている。東京大学史料編纂所所蔵の謄写本『松尾社一切経題跋集』（16）には、48 点の法然院所蔵松尾社一切経の經典について奥書等が記載されている。この書の奥付には、「京都市上京区鹿谷町／昭和十年十月京都市東山区林下町知恩院内知恩院史編纂所井川定慶氏提出カードヨリ転写了」とあり、昭和 10 年（1935）に知恩院史編纂所に所属していた井川定慶氏提出のカードを東京大学史料編纂所が写した謄写本であるという。

この『松尾社一切経題跋集』には、「松尾社一切経ノ朱印アリ」という記載や奥書等から松尾社一切経と確認できる經典の他に、四周双辺の「上」の朱印ありと記載された『大般若波羅蜜多經』や、「長寛元年（1163）四月廿四日於松尾社南谷妙法寺書／願主良慶／執筆僧良寛」との奥書がある『摩訶般若波羅蜜經』巻第 31 が記載されている。

「上」の印のある『大般若波羅蜜多經』は、妙蓮寺所蔵の松尾社一切経にもみられる。松尾社一切経の『大般若波羅蜜多經』は、殆どが当初の經典が散逸した後に補充されたもので、補充された『大般若波羅蜜多經』の多くにこの「上」の印が捺されている。長寛元年（1163）書写の僧良慶が願主となっている經典は、妙蓮寺所蔵の松尾社一切経にもみられる（17）。近藤喜博氏は、松尾社一切経の欠本を補うための補充經典ではないかとするが、良慶願経は、松尾社一切経の補充として書写された經典ではなく、新たに五部大乘経を中心に書写された。しかしながら、これらの經典の表紙には「重本」と墨書され、松尾社一切経のなかに組み込まれて伝来した。したがって、『松尾社一切経題跋集』に記載された經典は、すべて松尾社一切経として伝わったものが記載されていると考えられる。

中尾堯氏は（18）、法然院等が所蔵するこうした經典を、正保 4 年（1647）の『松尾社神宮寺一切蔵経目録』にすでに欠本がみられることから、江戸時代に松尾社読経所から流失したものではないかと指摘するが、法然院は、養鷗徹定が『大蔵経対校録』を謄写するために赴いた寺院である。また、正保四年の目録の段階で、すでに欠本とされている經典は、妙蓮寺や法然院、その他の機関にも現存していない。こうしたことを念頭に置いて、法然院に松尾社一切経が入った経緯について、検討する必要があるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、養鷗徹定の經典蒐集と松尾社一切経という視点で検討した。妙蓮寺に松尾社一切経が入ったのは、嶋田氏の寄進による安政 4 年頃であるが、嶋田氏が松尾社読経所に安置されていた松尾社一切経をどういう経緯で得たのかは不明である。しかしながら、①徹定の『古経題跋』に松尾社一切経を「松尾社神宮寺蔵」と記載していること。②妙蓮寺所蔵の松尾社一切経に徹定が蒐集した「一切経南都善光院」印のある袋中蒐集の念仏寺一切経の經典が混在していること。③徹定が滞在した法然院に松尾社一切経の一部が所蔵されていること等を考慮すると、松尾社読経所から妙蓮寺へという松尾社一切経の移動の過程で、養鷗徹定

との係わりが窺われる。

平安時代後期に書写された松尾社一切経については、3500 巻余りが現存していることから、写経史という視点で歴史学の立場では主に考察されてきたが、本稿では、それがどのように受容されて現在まで伝わってきたか、という視点で検討した。妙蓮寺に松尾社一切経が入った経緯は、不明な点が多いのであるが、江戸時代末期から始まる養鷗徹定の古經典の調査との関係という点をあらためて指摘したいのである。

註

- (1) 近藤喜博「松尾神社一切経」(神道史学会編『神道史研究』第5巻第2号《1957年3月》)参照。
- (2) 本門法華宗大本山妙蓮寺監修・中尾堯氏編『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』(大塚巧藝社、1997年2月)参照。
- (3) 大正新脩大藏経第55巻目録部全(大蔵出版社内大正新脩大藏経刊行会)に『貞元新定釈教目録』(No.2157)は所収されているが、この『貞元新定釈教目録』は高麗版を底本として、三階教関係經典等が削除されるなど後世の改竄がなされているので、本稿においては、これらの改竄がみられない牧田諦亮氏監修・落合俊典氏編集七寺古逸經典研究叢書第六巻『中国・日本經典疏目録』(大東出版社、1998年2月)所収の安元2年(1176)に書写された七寺一切経本『貞元新定釈教目録』巻第29・30を基本的に引用する。松尾社一切経全体の構成については、拙稿「松尾社一切経の南涅槃経と北本涅槃経—大般涅槃経の書写と表紙の改装をめぐって—」(『立正史学』89号《2001年3月》)、拙稿「松尾社一切経『大方広仏華嚴経』(60華嚴)の書写・校合・改装」(『寺院史研究』第8号《2004年8月》)等参照。
- (4) 伊藤益「法然院蔵松尾社神宮寺一切経目録(翻印)」(財団法人大東急記念文庫編『かがみ』第16号、1966年5月)参照。
- (5) 拙稿「研究余滴 松尾社一切経の目録」(『古文書研究』第71号、2011年5月)参照。
- (6) 牧田諦亮「徹定上人の生涯」(『仏教文化研究』36、1991年9月)、木本弘昭「徹定上人年譜稿(増訂)」(『仏教文化研究』36、1991年9月)、小島章見「徹定上人の著作論考—特に嘉永年代を中心とする壮年期の著作について—」(『仏教文化研究』36、1991年9月)、「徹定上人年譜」(『古経搜索録乾坤』《1972年》)、同書所収の牧田諦亮「年譜解題」、藤堂恭俊『『古経搜索録』解題』等参照。
- (7) 『解題叢書』全(国書刊行会、1926年1月)所収。
- (8) 註(2)前掲報告書所収。なお、本文に記したNoは、『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』に掲載されたデータの經典番号である。
- (9) 拙稿「松尾社一切経の校合一梵釈寺本について」(立正大学史学会創立80周年記念『宗教社会史研究Ⅲ』《立正大学史学会、2005年11月》)参照。
- (10) 註(2)前掲報告書所収。
- (11) 註(2)前掲報告書所収。
- (12) 註(2)前掲報告書所収。
- (13) 藤堂恭俊「養鷗徹定の古経蒐集と南都念仏寺蔵古経」(『藤原弘道先生古希記念 史学仏教学論集』乾《藤原弘道先生古希記念会編、1973年11月》)、三宅徹誠「袋中上人の一切経蒐集について」(『仏教論叢』49、2005年3月)、同氏「中国国家図書館所蔵袋中蒐集文献について」(『仏教論叢』51、

2007年3月)、同氏「袋中蒐集一切經の来歴と現況」(『国際仏教学大学院大学研究紀要』第12号《2008年3月》)等参照。

(14) 註(2) 前掲報告書所収。

(15) 川瀬一馬編『大東急記念文庫貴重書解題』仏書之部(大東急記念文庫、1956年)所収。

(16) 東京大学史料編纂所所収謄写本『松尾社一切經題跋集』。架蔵番号は2017—4。

(17) 註(2) 前掲報告書所収。

(18) 中尾堯「妙蓮寺蔵『松尾社一切經』の発見と調査」(『立正大学文学部論叢』第103巻《1996年3月》)参照。